

平成 2 8 年 4 月 1 4 日現在

機関番号 : 2 4 3 0 1

研究種目 : 基盤研究(C) (一般)

研究期間 : 2013 ~ 2015

課題番号 : 2 5 3 7 0 1 7 3

研究課題名 (和文) 日本・中国・インドにおける美術・工芸教育の共有化と社会還元システムの構築

研究課題名 (英文) Japan, China and India: Sharing Arts and Crafts Education for Social Empowerment

研究代表者

浅野 均 (ASANO, Hitoshi)

京都市立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号 : 5 0 3 1 5 9 2 5

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 3,700,000 円

研究成果の概要 (和文) : 東アジアでは油彩画を主軸とする西洋絵画に対し中国画、日本画と称する独自の絵画があり、芸術大学では絵画科の二重構造が一般的となっている。一方東南アジアから南アジアにかけては基本的に二重構造を有しないが、パキスタンとインド西ベンガル州の一部の美術大学において独自の伝統に基づいた絵画科が存在する。本研究では中国、日本、インドの研究者と芸術家が、各国の美術・工芸教育の成立過程と相互交流に関する現地調査を通じて最新の現況を共有してきた。その成果はカルカッタ美術工芸大学150周年記念事業での講演と実技授業、北京でのシンポジウムと資料展示等において発表し、新しい芸術運動の土台を築いたことにある。

研究成果の概要 (英文) : In East Asia, distinctive traditional painting styles called, “Guohua” or “Nihonga” respectively, coexisted with the Western style painting. In the art schools of those countries, it is common for the department of painting to have the double structure of Western art and their traditional style. In Southeast Asia and South Asia, though this double structure is not commonly seen, only few art institutions in Pakistan and India, the department of traditional painting coexists with the department of Western painting. In this project, artists and researchers from China, Japan and India have worked together interacting with each other to share views on the current status of arts and crafts education and process of further promoting and deepening education in their respective countries. The outcomes of these research activities were presented at the seminar at the 150th anniversary of Government College of Art and Craft, Kolkata and the symposium and presentation in Beijing.

研究分野 : 美術創作表現

キーワード : 美術教育 美術工芸 日本画 岩彩画 中国絵画 インド絵画

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成 21 年から 24 年にかけて、京都市立芸術大学を拠点にした活動が布石となっている。本校の卒業生・アジア各国からの元留学生・教員を主なメンバーとして設立されたアジア芸術家交流会実行委員会では、アジアの伝統的な素材や技法を作品にいかした美術・工芸を対象とするシンポジウム、セミナー、ワークショップ、交流展等を通じて、学術研究・国際交流の促進を図ることを目的とした活動を行ってきた。その成果は平成 23 年 6 月京都市立芸術大学にて開催された「京都からの出発」、同年 9 月韓国慶星大学校で開催された「国際都市釜山から世界へ」そして平成 24 年 8 月インド文化省の博物館施設、西ベンガル州コルカタのヴィクトリア記念堂において、インド文化省と共同で開催された「Art Across Asia-Renewed Encounters」で順次発表を行った。

以上の活動を経た上で、明らかになったことは、各国における現在の美術・工芸の教育制度と作家自身の考え方について、大幅な差異があることであった。そのため互いの相違を理解し、差異を埋めることを目的の一つとして、歴史的にも繋がり強いインドと中国の芸術大学とともに、両国の社会的活力と日本での研究成果を融合させること、そして各国の現代美術・工芸を社会に還元するシステムの構築にむけて共同研究を行うことが実行委員会で話し合われ、本研究の構想がまとめられた。

2. 研究の目的

近年アジア新興国として発展を遂げてきた中国とインドがその社会変化を背景に、政府機関や民間団体が先導し美術館・博物館施設の充実をはかり、社会問題改善のために美術・工芸を積極的に利用した活動が急速に進んできている。本研究の特色は両国の社会的活力とともに日本側の研究機関として京都市立芸術大学が中心となって調査研究をすすめるものである。東アジアでは中国・韓国・日本による芸術交流及びその研究調査はこれまで数多く行われてきており、特に京都市立芸術大学日本画研究室が現代中国における岩彩画の復興、及び、古典絵画の保存修復に果たしてきた役割は大きい。本研究は中国に関しては、先行研究を土台にしつつ、日本画・岩彩画のみならず工芸の分野まで広げてさらに詳細研究をすすめる。インドの美術・工芸教育の研究としては現地の教育機関と合同で行う初めての本格的な調査となる。

本研究ではこれまでの活動で蓄積してきた中国やインドとのネットワークと芸術交流の基盤を最大限に活かし、アジアが共有する芸術文化の文脈を形成し、今後の美術・工芸教育に活かす。本研究はアジアの伝統に根ざした美術工芸を次世代に還元し、多文化社会の未来へ引き継いでいくことを最終目的に置いている。

3. 研究の方法

研究代表者及び協力者は日本での研究活動を基盤とした上で、中国研究とインド研究に分かれ、各国の研究協力者とともに現地での調査研究を並行して行う。調査研究は以下の五段階の順序で進める。

(1) 各大学に残る歴史的資料・文献を調査することにより、西洋美術教育及び伝統的な美術教育がどのように統合されて作り上げられて行ったのか美術・工芸教育の成立過程を明らかにする。

(2) 各国での教育機関におけるアジア交流の歴史に焦点をあて、歴史資料及び過去の展覧会等の記録からその歴史的意義及び美術・工芸教育における現在に至る影響を明らかにする。

(3) 以上の成果を踏まえた上で、現在の美術・工芸教育に関するフィールドワークを行い現況を明らかにする。

(4) シンポジウム・レクチャー・ワークショップ・出版物を通じて研究成果と最新の情報を共有する。

(5) 以上の研究成果をもとに、各国の教育機関や民間団体とともに次世代の社会へ還元するシステムの土台を構築する。

4. 研究成果

(1) 平成 25 年中国班の研究成果

北京では中央美術学院美術館での調査を実施するとともに、798 芸術特区等の芸術特区において中国の現代美術工芸の社会還元システムの最新の現状に関して検証を行った。また上海では当代芸術博物館、中華芸術宮等の現地調査を行い、宜興では中国宜興陶磁博物館の調査とともに紫砂国家級工芸作家との懇談を通じて陶刻制作と現代美術が共同で行う今後の活動について話し合われた。さらに杭州の中国美术学院、雁蕩山風景区の美術基地及び画院、そして香港の当代芸術館、香港美術館、香港大学美術館、茶芸博物館での調査を期間内に完了させた。

本研究調査を通じて現在の中国の美術教育の根幹を成す大学などの教育施設は、中国政府や自治体等も積極的に関わることで日々多様になりた巨大化し、それに比例して大規模な美術館なども多く新設されている。以上各地における現状の詳細を現地の研究協力者と共有するとともに多くの資料を収集することができた。

尚、本年度の調査対象となったのは以下の大学・団体である。北京：中央美術学院、大学美術館、798 芸術特区等の芸術特区。上海：当代芸術博物館、中華芸術宮他。宜興：中国宜興陶磁博物館。杭州：中国美术学院。雁蕩：

雁蕩山風景区美術基地及び画院。香港：香港当代芸術館、香港美術館、香港大学美術館、香港茶芸博物館。

(2)平成 25 年インド班の研究成果

インドでは 19 世紀半ば以降、英領時代により、本格的な美術教育が開始した。インド・パキスタンの分離独立を経て現在ではインド各地の国立・公立・州立美術大学に加え、特に都市部では新しい私立の芸術大学が設立されてきている。本研究の前半では、20 世紀初めから半ばにかけてインドの近現代美術の発展の拠点となった西ベンガル州のカルカッタ（現コルカタ）とシャンティニケータンの美術大学を中心に、その歴史的背景から現在に至るまでの経緯、教育の現状について特に美術・工芸の分野において資料調査及び教員のインタビューと学生へのアンケート調査を実施した。さらにシャンティニケータンでは他の地域と異なり、民間で美術・工芸を通じた社会活動を行っている団体があることから、これらの活動についても実際に参加しつつ調査を行った。

また研究後半では、インドの首都ニューデリーとウッタール・プラデーシュ州ノイダの主要な国立芸術大学と近年設立された公立・私立の新設校の調査を同様の方法で行い、特に新設校においては実際に授業に複数回参加することで現在のインドで模索されている最新の美術教育のあり方について調査を行った。以上の一連の現地調査を通じて、これまで日本ではほとんどその詳細を知られることのなかったインドの芸術大学の現状について広く把握できたと同時に、今後予定している日本や中国との共同活動のための人的ネットワークの幅が大きく広がったことも成果の一つである。

尚、本年度の調査対象となったのは以下の大学・団体である。西ベンガル州コルカタ：州立カルカッタ美術工芸大学（1854 年設立）、州立ラビンドラ・バーラティ大学美術学部（1962 年設立）、1893 年に設立され現在はラビンドラ・バーラティ大学の提携校となっているインディアン・カレッジ・オブ・アート。西ベンガル州シャンティニケータン：ラビンドラナート・タゴールにより 1921 年に設立され、インド独立後、国立大学となったヴィシュヴァ・バーラティ大学美術学部、1922 年タゴールによりシャンティニケータン近郊に農村再建の目的で設立されたシュリニケータン手工芸学校。また 2012 年にシャンティニケータンの芸術家団体により設立されたボンドウ・アーツ・イニシアチブによる農村地域支援活動に参加した。首都デリー及びウッタール・プラデーシュ州ノイダ：国立デリー大学の提携校デリー美術大学（1942 年設立）、国立ジャミア・ミリア・イスラミア大学美術学部（1951 年設立）、私立アミティ美術大学（2004 年設立）、公立アンベードカル

大学大学院文化・創造的表現科（2012 年設立）、私立シヴ・ナダル大学大学院人文社会科学部美術・デザイン・パフォーマンスアーツ科（2014 年設立予定）。

(3)平成 26 年中国班の研究成果

本年度は四川省重慶の中国重点美術大学の一つである四川美術学院の調査を行った。現地では美術学院の教員と懇談を行い、教育環境やカリキュラムの詳細についてインタビューを行うとともに、大学付属施設の見学を行った。四川美術学院で特筆されるのは大学に併設される美術館である。四川美術学院美術館は周囲の農村環境の自然と共存する稀有な施設となっている。また美術学部の重要なカリキュラムとして挙げられるのは重慶から 130km 離れた美術教育基地である中国南方カルストにおけるスケッチの授業である。このカリキュラムでは四川美術学院独自の山水画制作の基礎教育が行われており、学生達は現地を訪れ奇観を観察しながらデッサンを行っている。このような日本には存在しない教育プログラムが中国独自の風景画を作り上げる根幹となっていることが本調査において明らかになった。

(4)平成 26 年インド班の研究成果

平成 25 年の調査で訪問した西ベンガル州カルカッタ美術工芸大学からの依頼により、京都市立芸術大学との協力のもと、大学創立 150 周年記念事業の一環として日本画セミナーと実技授業を開催した。一方でシャンティニケータンにおいてはヴィシュヴァ・バーラティ大学美術館の日本美術コレクションの調査を実施し、現存する作例により 1960 年代のシャンティニケータンの絵画科で同時代の日本画教育が導入されたことが明らかとなった。また前年度に引き続きシャンティニケータンの芸術家団体ボンドウ・アーツ・イニシアチブの農村地域支援活動に参加し、その詳細を記録に残すことができた。

西ベンガル州以外の地域では、本年度は新たに西部インドの芸術文化の中心地であるムンバイにおいて、英領時代に設立され現在までインドにおける重要な芸術大学の一つとなっている J J 美術大学を訪問し、その歴史的背景から現在に至るまでの経緯、教育の現状について特に美術・工芸の分野において資料調査及び教員へのインタビューを実施した。さらにインド分離独立後に設立され、現在までインドの最先端の美術教育を牽引してきたマハラジャ・サヤジラオ大学美術学部において資料調査及び教員・学生へのインタビューを実施するとともに、本研究の意義や活動を紹介する目的で美術学部でレクチャーを行った。本年度の成果としてはこれまでの研究活動がカルカッタ美術工芸大学における 150 周年記念事業の開催へと結びつき、現地での講演や日本画の実技授業がメディアに取り上げられ広く注目されたことが第

一に挙げられる。

(5) 平成 27 年三ヶ国共同事業による研究成果

平成 27 年度はこれまで二年間継続してきた研究調査の成果として、日本・中国・インド、三ヶ国の教育機関に所属する研究者と芸術家と合同で、「アジアにおける美術教育の共有化に向けて」と題した出版物を日本語・中国語・英語の 3 ヶ国語で 500 部刊行した。本冊子では各国の美術教育の資料として三ヶ国の芸術家達がこれまでに研究期間従事してきた作品が数多く紹介されるとともに、その背景を詳細に検証する論考が研究者達により執筆・掲載された。出版物は全 103 頁、7 名の共著となっている。

さらに出版と並行して、北京において 10/10-16 にかけて同じく「アジアにおける美術教育の共有化に向けて」と題したテーマで資料展示と討論会を開催した。中国からは北京・上海・広州・河北省・西安の各地域において美術教育に従事してきた専門家が参加し、特に日本画とつながりの深い岩彩画を中心に各自の視点から美術教育の現況と今後の展望に関して意見交換が行われた。またインドからは国内で唯一インド絵画科を有する芸術大学から参加した教員により、その歴史的背景と現況の詳細が紹介され、本研究活動を三ヶ国共同で継続することで、今後のインドの美術教育に還元したい旨が述べられた。会場では参加者によって三ヶ国の美術教育に関わる資料展示が行われ、また同時に現地で上記の出版物を配布することで、大学関係者のみならず一般の観客にも広く公開され、メディアを通じても注目を集めた。以上のことから本年度の活動は本研究が目指した社会還元の役割を十分に果たし終わることができたと判断される。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山本緑、インド西ベンガル州における芸術大学の現状、京都市立芸術大学紀要、査読無、59 巻、2015、39-51

〔図書〕(計 1 件)

浅野均、アジアにおける美術教育の共有化に向けて、田中プリント、2015、103

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

浅野均 (ASANO, Hitoshi)
京都市立芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：50315925

(2) 研究協力者

王雲 (WANG, Yun)
北京中央美術学院・人文学院・副教授

苗彤 (MIAO, Tong)
上海大学美術学院・副教授

翟建群 (ZHAI, Jianqun)
陝西国画院・特任画家

アプルバ・セングプタ (SENGUPTA, Apurba)
カルカッタ美術工芸大学・助教授

山本緑 (YAMAMOTO, Midori)
京都市立芸術大学・特任研究員